潮騒
第58号
令和7年
8月1日

公益財団法人 日本殉職船員顕彰会
〒102－0083 東京都千代田区麹町四－五 海事センタービル
電　話　〇三－三二三四－〇六六二
FAX　〇三－三二三四－〇六八二

海洋永久の平和を
第52回戦没・殉職船員追悼式
観音崎公園

御霊の鎮魂と海洋永久の平和を祈り黙とうを捧げる

第52回戦没・殉職船員追悼式は、初夏の強い日差しの中、5月14日、神奈川県立観音崎公園「戦没船員の碑」（横須賀市）で、全国各地からご遺族をはじめ立法および行政関係者、海事関係団体ならびに業界代表者、約３４０人が参列し例年どおり盛大に執り行われた。

式典に先立ち、海上自衛隊横須賀音楽隊による「真白き富士の嶺」「椰子の実」「千の風になって」の曲が、おごそかに演奏されると、参列者は静かに聴き入った。

式典は午前11時にはじまり、国家斉唱、黙とうに続き、会長式辞、内閣総理大臣追悼の辞が捧げられた。

海上自衛隊横須賀音楽隊による、海に殉じた人々へのレクイエム（鎮魂曲）『君は帰る母なる海へ』が演奏される中、会長、遺族代表、海事振興連盟、各界代表に続いて参列者全員が白菊を供え、戦没・殉職船員の御霊の鎮魂と海洋永久の平和を願って、祈りを捧げた。

東京湾口を望む「戦没船員の碑」の式場で、観世一門による能楽「海霊」が奉納された。

～知られざる民間船舶の悲劇～
第51回 戦時徴用船遭難の記録画展
大久保一郎画伯遺作

静岡市清水文化会館 マリナート

9/5～9/15

入場無料

大阪商船（現・商船三井）の嘱託画家だった大久保一郎画伯は、戦況が悪化した昭和17年、当時の岡田永太郎社長から「次々に沈められる社船の最期を記録にとどめるように」と言われました。

無料公開される遺作37点は、いずれも先の大戦で、そのほとんどが海の藻屑となった戦時徴用船の壮絶な最期と乗組員の悲惨な実相を伝える貴重な資料です。

■会　期　9月5日㊎から
9月15日㊊まで
・開館時間は　10時00分から
17時30分まで
・休館日　9月8日㊊
・初日の　9月5日㊎は、
13時00分開場
・最終日の9月15日㊊は、
16時00分閉場

■会　場　静岡市清水文化会館
マリナート　1階　ギャラリー
静岡県静岡市清水区
島崎町２１４番

■主　催　（公財）日本殉職船員顕彰会

魚雷攻撃により棒立ちとなって沈没する
「ぶら志る丸」

波静かなれ　とこしえに
第52回戦没・殉職船員追悼式

戦没船員の碑

式典は、夏を思わせる強い日差しが照りつける、神奈川県立観音崎公園の戦没船員の碑で、保坂均理事長の開式の辞に続いて国歌斉唱の後、「国の鎮め」の演奏にあわせ、戦没・殉職船員6万3618名の鎮魂と永久の平和を祈念して黙とうを捧げた。

顕彰会を代表して、内藤忠顕会長が式辞を、国を代表して内閣総理大臣追悼の辞を古川康国土交通副大臣が代読した。

◎式　辞　内藤忠顕　会長

本日ここに、第五十二回戦没・殉職船員追悼式を執り行うにあたり、全国各地からご遺族をはじめ関係者の方々のご参列を賜りましたことに、心から感謝申し上げます。

先の大戦において、物資等の輸送に従事し、祖国を思い、家族を案じつつ、戦禍に斃（たお）れた戦没船員六万六百四十三人と、海難などにより殉職された二千九百七十五人の御霊に対し、謹んで哀悼の誠を捧げます。

今日の、海洋国家日本としての平和と繁栄は、志半ばで海に散った戦没船員と、わが国の復興を支えた海運・水産業で、不幸にしてその職に殉じられた船員の尊い犠牲のうえに築かれたものであることを、私たちは決して忘れてはなりません。

また、かけがえのない家族を失った深い悲しみに耐え、幾多の困難を乗り越えてこられたご遺族の皆様の労苦と心情に思いをいたし、改めて心からの哀悼の意と深甚なる敬意を表します。

さて、今年は終戦から八十年という節目の年を迎えます。戦争の記憶は年を追って薄れていきますが、戦争の悲惨さを次の世代へと継承していかなければなりません。私たちは、これからも戦没・殉職船員の御霊の慰霊・顕彰と、海洋国家日本の永久の平和と安全を祈念していくことを、ここにお誓いいたします。

安らかにねむれ　わが友よ
波静かなれ　とこしえに

ご参列いただいた皆様とともに、この碑に刻まれた御霊への祈りを捧げ、本会を代表しての式辞といたします。

◎内閣総理大臣追悼の辞　古川康国土交通副大臣代読

第五十二回追悼式が挙行されるに当たり、戦没・殉職船員の方々の御霊に対し、謹んで哀悼の誠を捧げます。

先の大戦においては、六万人余りの船員の方々が、祖国を思い、家族の行く末を案じながら、戦禍に遭われ、尊い命を失われました。戦後も、海難事故や労働災害により二千九百人を超える船員の方々がその職に殉じられています。

今日の平和と繁栄は、海とともに生きた多くの方々の尊い命と苦難の上に築かれたものであります。私たちは、そのことを、片時たりとも忘れることはありません。衷心より、敬意と感謝の念を表します。

戦争の終結から八十年の節目を迎えるにあたり、祖国の未来を想い、蒼海に眠る船員の方々の御霊の御前で、恒久の平和と海上交通の安全に全力を尽くして参りますことを、改めてここに固くお誓いいたします。

御遺族の皆様の深い悲しみに思いを致すとともに、戦没・殉職船員の方々の御霊の永久に安らかならんことを心からお祈りいたします。

献花を捧げる

海上自衛隊横須賀音楽隊による鎮魂曲「君は帰る母なる海へ」がおごそかに演奏される中、献花が行われた。

日本殉職船員顕彰会を代表して内藤忠顕会長に続いて、ご遺族を代表して戦没船員遺族の猪股貞雄さんと髙井由美子さん、殉職船員遺族の山田浩之さんと織田幸恵さんが白菊を捧げた。

古川康国土交通副大臣、各界の代表者献花に続いて、参列者の方々の献花が行われた。

◎来賓・各界代表献花者（敬称略）

猪股　貞雄（戦没船員遺族代表）
髙井由美子（戦没船員遺族代表）
山田　浩之（殉職船員遺族代表）
織田　幸恵（殉職船員遺族代表）
古川　康（国土交通副大臣）
宇佐美和里（海事振興連盟事務局長）
土屋　恵嗣（日本船主協会副会長）
長岡　英典（大日本水産会常務理事）
松浦　満晴（全日本海員組合組合長）
酒井智代子（全国海友婦人会会長）
田中　茂（横須賀市副市長）
五十嵐　敬（神奈川県横須賀土木事務所長）
小島　博（神奈川県横須賀南警察署長）
真殿　知彦（海上自衛隊横須賀地方総監）
赤松　宏樹（海上保安庁第三管区海上保安本部長）
横井　幸治（国土交通省海難審判所長）
神南　逸馬（運輸安全委員会横浜事務所長）
井関　俊夫（東京海洋大学長）
田島　哲明（海技教育機構理事長）

◎式電をいただいた方々（敬称略）

齋藤　聡（防衛省海上幕僚監部　海将　海上幕僚長）
藤澤　正人（神戸大学長）
國枝　佳明（富山高等専門学校長）
古山　雄一（鳥羽商船高等専門学校長）
逸見　真（広島商船高等専門学校長）
藤本　隆士（大島商船高等専門学校長）
内田　誠（弓削商船高等専門学校長）
折野　勲（福岡海寿会会長）

献花を捧げる、日本殉職船員顕彰会　内藤忠顕会長

古川国土交通副大臣

遺族代表の猪股さん、髙井さん、山田さん、織田さん（右から）

松浦海員組合組合長（右）・酒井海友婦人会会長

宇佐美海事振興連盟事務局長・土屋日本船主協会副会長
長岡大日本水産会常務理事（右から）

真殿横須賀地方総監、赤松第三管区海上保安本部長
（右から）

田中横須賀市副市長、五十嵐横須賀土木事務所長
小島横須賀南警察署長（右から）

献花を捧げるご遺族

横井海難審判所長、神南運輸安全委横浜事務所長
井関東京海洋大学長、田島海技教育機構理事長
（右から）

海上自衛隊横須賀音楽隊

献花を捧げるご遺族

実行委員の皆さん

マイクロバスで担当現場に向かう第１陣の実行委員

東京海洋大海事普及会、横須賀海洋少年団の皆さん

追悼式実行委員会で綿密な打ち合わせ

参列者にお配りする最中の袋詰め作業

受付する参列者の皆さん

受付の準備をする実行委員の皆さん

戦没・殉職船員追悼式は関係団体と個人協力者の支援で運営されています

追悼式典の運営には実行委員のご支援が欠かせません。第52回追悼式には、海事関係15団体・41人と個人協力者７人に顕彰会スタッフ５人を加えた53人が携わりました。

当日は昨年に続き、夏日を思わせる強い日差しが照りつける中で、大きな混乱もなく滞りなく終了できましたことは、皆さまのご支援、ご協力の賜物と感謝いたします。

今回も実行委員の皆様から、次回につなげるご意見・要望がよせられました。その一部を紹介します。

受付に荷物を搬入する実行委員の皆さん

■男性（担当・遺族受付）

昨今の世界各地での紛争を見ていると、世代を経れば経るほど人間は過去の戦争のことは忘れてしまうものだと思います。

太平洋戦争の頃から各国の関係や兵器も大きく変化していますが、戦争自体の悲惨さは何も変わっていません。それを忘れないためにも我々だけでも次世代に伝えていかなければなりません。

ご遺族は減っておりますが、大学生も参加してくれる追悼式は貴重な機会です。

可能な限り、続けていただいて、私もお手伝いしたいと思います。

■女性（担当・案内・献花・リボン）

戦没・殉職船員追悼式の運営に関われたことを大変光栄に思います。

海事普及会の活動を通じて、初めて「戦没船員」の存在を知り、太平洋戦争では多くの若い民間船員が犠牲になっていたことに驚き、戦争の悲惨さを実感しました。こうした歴史はあまり知られておらず、平和の陰にある犠牲を忘れてはならないと強く感じました。

記憶を風化させないためにも、この追悼式に関わることができて、本当に良い経験となりました。

■男性（担当・案内・献花）

私自身、海事普及会として二度目の参加となります。まずは実行委員として追悼式に関わらせていただき誠にありがとうございました。

式を通じて改めて実感したのは、現在の安全で整った船の生活や海運業界の発展が、過去に命をかけて海に出られた先人たちの犠牲と努力の上に成り立っているという事実です。追悼の言葉や献花の時間には、そうした歴史の重みを深く感じ、自分自身もこの業界の未来を支える一員として、責任と誇りを持って歩んでいきたいという気持ちが強まりました。

将来は海運業界で働きたいと考えておりますが、その思いを新たにする大変貴重な機会となりました。今後もこのような機会を通じて、先人への感謝を忘れず、自分の進む道に真摯に向き合っていきたいと思います。

■女性（担当・一般受付）

私は東京海洋大学で学んでおり、「海を知り、海を守り、海を利用する」という理念のもと、海洋に関する教育や研究に取り組んでいます。

今回の式典を通じて、今の日本の平和と発展が、戦没・殉職船員をはじめとする多くの方々の尊い犠牲の上に成り立っていることを、改めて強く実感いたしました。特に、戦時中だけでなく、戦後の日本の復興や経済成長においても、船員の方々が果たした役割は極めて大きなものであったことに、深い敬意の念を抱きました。

また、当時命を落とした方々の多くが、自分たちと同世代、あるいはそれ以下の若い世代であったことにも心を打たれました。

参列者に渡す白菊の準備

▽横須賀海洋少年団（８人）▽東京海洋大学海事普及会11人）▽全日本海員組合本部（６人）▽全日本海員組合関東地方支部「海友会」（２人）・「木洋会」（２人）▽日本船主協会（２人）▽大日本水産会（２人）▽日本内航海運組合総連合会▽全日本船舶職員協会▽日本船舶機関士協会▽日本船長協会▽日本海事広報協会▽日本水先人会連合会▽海技振興センター▽海洋会　以上各１人▽個人協力者（７人）に顕彰会（５人）が加わり、今回は53人で実行委員会を構成しました。（順不同）

式典終了後、送迎バスを待つ参列者の皆さん

■男性（担当・車両・会場乗降口）

今回、戦没・殉職船員追悼式に実行委員として参加し、戦没・殉職船員の多さに驚かされました。その数の大きさだけでなく、ご遺族の方々のお姿を実際に目にすることで、戦没・殉職者は単なる数字ではなく、かつて確かに生きていた一人ひとりの「人」であったのだということを強く実感し、胸が痛む思いでした。

私にとって、戦争や船員の犠牲はこれまで教科書やネット上の情報でしか触れたことがなく、どこか遠い存在に感じていました。しかし、今回の経験を通して、その事実が非常に現実的なものとして自分の中に刻まれたように思います。

亡くなられた方々が直面した困難を、私が完全に理解することはできませんが、彼らと同じように船員を志す者として、厳しい状況の中で職務を全うされた姿勢には深い尊敬の念を抱きます。そして、彼らの存在とその想いを、これからの世代へ伝えていくことの重要性も感じました。

今回得られた気づきを胸に、今後も勉学に励み、海の未来を支える一員として成長していきたいと思います。

■女性（担当・案内・バス停）

戦没・殉職船員追悼式の運営に関われたことを大変光栄に思います。

海事普及会の活動を通じて、初めて「戦没船員」の存在を知り、太平洋戦争では多くの若い民間船員が犠牲になっていたことに驚き、戦争の悲惨さを実感しました。こうした歴史はあまり知られておらず、平和の陰にある犠牲を忘れてはならないと強く感じました。記憶を風化させないためにも、この追悼式に関わることができて本当に良い経験となりました。

■女性（担当・受付・役員）

参列者の方々を席へご案内する際、戦時中の体験や戦後間もない頃の生活についてお話をしてくださる方もおり、大変貴重なお話を伺うことができました。その一つひとつの言葉から、当時の厳しい状況が伝わってきて、今の私たちの暮らしがどれほど恵まれたものかを改めて実感しました。

この度は、このような貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

■女性（担当・案内・バス停）

追悼式では、参列者の方だけでなく、地域の方々ともお話することができました。「今年は天皇陛下がいらっしゃるのですか」といった質問や、以前の式典の思い出を語ってくださる方もいて、この追悼式が長年にわたり地域とともに歩んできた行事であることを実感しました。

私は式場入口の担当でしたが、多くの関係者が行き交う中で、式の規模の大きさ、そして関わる人の多さに驚かされました。自分もその一端を担えたことを誇りに思います。

■女性（担当・受付・遺族）

改めて海の仕事の厳しさと尊さを感じました。遺族の方々の深い悲しみと、故人への深い敬意を感じ、実行委員として精一杯務めさせて頂いたつもりです。しかしながら、限られた時間の中、十分なご案内やサポートが出来なかった部分もあったのではないかと反省しています。この経験を通して、命の尊さ、そして海で働く人々の勇気と献身に改めて感謝の気持ちを持つとともに、海の安全を願う気持ちが強くなりました。

■女性（担当・受付・遺族）

今回の追悼式に参加するまで、戦没船員について深く考えたことはありませんでした。ですが、実行委員の方々やご遺族の方から話を伺う中で、私たちと同じような若い方々が、命をかけて任務にあたっていたことを知り、衝撃を受けました。そうした方々がいたからこそ、私たちは今、平和の中で学び、生活できているのだと強く感じました。

若い世代として、こうした記憶を受け継ぎ、伝えていく責任があると感じています。

戦没船員のご冥福を
原油でドロドロの海を泳ぐ

孫娘のご主人、大矢さん、孫娘と曾孫

■大矢秀二さん（96歳・横浜市）

今回の第52回戦没・殉職船員追悼式には、大矢さんの孫娘夫婦一家（孫娘、孫娘のご主人、曾孫）の家族４人での参加。孫娘一家は初めての参加。昨年の８月にＴＢＳで放映された「ＮＥＷＳ23特別企画」で、大矢さんが綾瀬はるかさんのインタビューを受けて、戦時中に魚雷攻撃を受けたときの体験を話したのを聞いて、参加したいと思ったとのこと。

大矢さんは、13才で高等小学校を卒業して、和歌山県海南市の海員養成所に行き、乗船する船がなく待っていたが、昭和19年８月26日に機関部見習いで新造船に乗ることができた（当時14歳）。しかし、11月に新造船が魚雷攻撃を受け、乗組員３人が死亡した。また、船首側の居住区に31人の便乗者がいたが、船首側居住区の便乗者は全員死亡した。乗船していた新造船は油槽船で、４つの船倉のうち２つに原油を積載していた。魚雷攻撃を受け、ドロドロの海を泳ぎ、護衛艦に救助され、サイゴンに到着し、日本への便乗船を待つ間（約１カ月）、サイゴンの海軍病院の３階の広間で過ごした。日本に帰国後、乗る船もなく、終戦となった。

新造船が約３カ月で沈んでしまったので、乗組員の同僚や船長の名前も覚える間もなかったが、戦後は数えきれないくらい、この戦没船員の碑（観音崎公園）の追悼式に参加し戦没船員のご冥福を祈っている。

献花を捧げる大矢さんご家族

暁の宇品
陸軍船舶司令官たちのヒロシマ
堀川惠子
講談社

堀川惠子さんが執筆した本書は、「人類初の原子爆弾は、なぜ〝ヒロシマ〟に投下されたのか。」この疑問から取材は出発した。広島が軍事都市であったから？ただひとつだけ他の都市にない特殊な事情があった。

アメリカが原爆の標的に、広島を選んだ理由は、日本陸軍最大の輸送基地・宇品があったからだ。

陸軍船舶司令部（暁部隊と呼ばれた）は、戦地へ兵隊を運ぶだけでなく、補給と兵站を一手に担っていた。

陸軍船舶司令部に関する資料は焼失していて、３人の軍人が残した未公開資料の発掘、聞き取り調査、分析などを経て執筆されたのは、ノンフィクション作品「暁の宇品・陸軍船舶司令官たちのヒロシマ」（講談社）である。

「船舶の神」と言われた船舶司令官・田尻昌次中将は、民間船舶、船員の不足対策について、陸軍省等に意見具申し開戦に異議を唱えている。

また、田尻は民間船舶の徴用による兵員、兵站の海上輸送について、「船員は運命を船とともにし、労働は昼夜を問わず連続的、天候など不測の労働が多く、労働力の補充は困難で、常に過重労働を強いられ、家族とも別れ、食糧、疾病、療養問題は遥かに根本的である。このような悪条件に加えて、戦時には船員不足で、賃金の低下などで悪条件は倍加するばかりか予測できない事態に身を晒している。特に陸海軍徴用船で第一線にある者は一層の危険が大。危険に身を晒しているにもかかわらず、その身分を保障する国家的処遇に欠けていることは不合理極まる状態だ。（略）」と陸軍省に訴えている。

四面を海に囲まれた日本は、資源、食糧等の輸入を船に頼っている。戦地に兵隊、武器、食糧を運ぶのは船。

また、外地から資源等を運んでくるのも全て船。アメリカは、日本を屈服させるには、輸送船や輸送基地を攻撃することだと開戦前から研究、対策を十分に準備していた。

現在、日本の貿易量の99・6％を運んでいるのは船。シーレーン（海上交通路）の安全を確保することは、戦時中も現在も重要である。

第48回大佛次郎賞受賞
（令和３年12月）

遺児たちを守る支援制度

殉職船員遺族援護　遺児へ援護金を支給

『戦没船員の碑』が昭和46年に建立されてから10年間、戦没船員追悼式を毎年5月に執り行っていました。この式典が戦没船員の追悼に限られていたことから、同じ海の職場に命を捧げた商船や漁船等の殉職船員の慰霊についても配慮してほしいとの要望が高まりました。

これを機に、すべての殉職船員に慰霊の誠をあらわし、その業績を顕彰するとともに、海洋永遠の平和を祈念するための『戦没・殉職船員追悼式』を国民的行事として行うことによって、国民の海洋精神の高揚を図り、海洋立国の認識を深めることを目的として、戦没・殉職船員の業績調査と、その功績を後世に伝え、戦没・殉職船員遺族の援護にあたるために、昭和56年4月に「戦没船員の碑建立会」の事業を継承して、財団法人として日本殉職船員顕彰会が発足しました。（平成23年公益財団法人の認定を受け、移行登記する）

当会の殉職船員遺族援護事業は、昭和58年に外航船13人・内航船7人の殉職船員遺児に対して給付が行われてから、平成2年の外航船59人・内航船63人・旅客船13人・その他9人をピークに漸減しています。

海難や労災事故はあってはならないことですが、殉職船員遺児援護制度を知らないために苦境におかれていては大変です。

個人情報保護の関係から事故情報が取りにくい状況にあります。

船社や業界関係団体の積極的なご協力をお願いいたします。

返還義務のない制度

当会の殉職船員遺族援護事業は、商船などに乗船中、海難や労災事故で殉職した船員の遺児に援護金を給付する制度で、返還の義務はありません。

支給額は1人月額8千円のほか、入学記念品代として小学校入学時に3万円、中学校入学時と高校入学時には、それぞれ1万円を給付します。

支給期間は、遺児が生まれてから義務教育および高等学校を終了するまで。詳しくは、当会事務局まで。

漁船乗組員の遺児の方は、漁船海難遺児育英会（☎03・3518・6121）が援護事業を行っていますので、お問い合わせください。

殉職船員ご遺族からのお便り

殉職船員ご遺族の方々からのお便りを紹介します。

■織田幸恵さん（広島県）

5月14日に行われた戦没・殉職船員追悼式に参加させていただき命の尊さについて考え、海に関わる方がたの安全を思いながら献花させていただきました。多くの関係者の方のお気持ちや海上自衛隊音楽隊のすばらしい演奏そして能の奉納等、全てに感謝の一日でした。

ありがとうございました。

■佐藤亜希さん（宮城県）

春輝も中学2年生になり、将来の夢を持ちそれに向かって頑張っています。

毎日暑くて大変ですが頑張って学校に通っています！

いつもありがとうございます。

戦没船員の碑　群像

能楽「海霊」奉納

能楽「海霊」は、先の大戦で戦没した船員6万余人の霊を慰め、その徳をあきらかにし、併せて平和を祈るために、宮越賢治船長が作詞、25世観世左近元正帥により作曲され、昭和46年5月6日、皇太子同妃殿下の行啓のもとに第1回戦没船員追悼式が挙行されるにあたり、能楽「海霊」を奉納することとしていましたが、降りしきる雨により懇親会場で奉納され、それ以来、追悼式典では「海霊」が宮越船長をシテ（主役）として観世一門によって奉納されています。

宮越船長は、昭和61年に亡くなられましたが、その後は観世一門により絶えることなく奉納が続けられています。

戦没船員の碑

「戦没船員の碑」　海上自衛隊横須賀地方総監部空撮

戦没船員の碑建立の経緯

昭和12年から満８年にわたり、太平洋全域からインド洋にまで及んだ先の大戦は、別名海上交通戦争ともいわれ、わが国の商船をはじめ、機帆船、漁船など、船と名のつくものはほとんど徴用され、海上輸送や監視の任に従事しました。

しかし、真珠湾奇襲作戦から約半年、連合軍が反撃に転じてからは、これら船舶に対する連合軍（主として米軍）の攻撃は熾烈なものとなり、戦争が終ったときには、海運、水産界は文字通り壊滅状態となりました。

この戦争で６万余人の尊い船員の命が犠牲となり、破壊された船舶は、商船だけで２、５００隻、８５０万総トンにも達しました。機帆船、漁船等の被害状況の把握は、今日に至っても不詳の部分が多く、そのほとんどが壊滅するという悲惨なものとなりました。

戦後の失意の中にあって、報われることなく海底に眠る船員の霊を慰め、本来は平和産業の士である船員が二度と戦火の海に航くことのないようにとの祈りをこめて、記念碑を建立する運動が有志の間で始められました。しかし、占領下の特殊事情もあって、実現をみるに至らぬままに20年余が経過いたしました。

この間、目ざましい復興発展を続ける海運・水産界にあって、この戦没船員の慰霊と永遠の平和を希求する人びとの願望は、次第に強い高まりをもって広がっていきました。

このような中で、昭和41年秋、財団法人日本海事広報協会が中心となって記念碑建立の具体化を図ることになり、海事関係官庁や団体等によって、戦没船員慰霊顕彰碑建立準備委員会が組織されました。この委員会は、観音崎を最適地として「戦没船員の碑」を建立するという基本計画をまとめ、さらにその実現に向けて、昭和44年７月20日、財団法人戦没船員の碑建立会の設立へと発展、建立資金総額１億４０００万円の募金を全国民に呼びかけました。この募金には、政府および財団法人日本船舶振興会の補助金をはじめ、海事関係の団体、船社、役職員、乗組員、さらには各地の小中学生等の多くの方々から募金が寄せられ、目標を達成することができました。

碑建立の工事は、昭和45年６月30日に起工式を行い、46年３月25日に完成いたしました。

私どもはここに、戦没船員の霊を慰め、永遠の平和を祈念する戦没船員の碑を建立することができました。

顕彰会の設立と殉職船員

先の大戦で生き残った船員たちは、戦後休む間もなく６００万人を超える各戦域に散在する兵員と外地邦人の引き揚げ輸送（アメリカ側から貸与されたリバティ型貨物船等２００余隻）に従事し、昭和21年末までにはほとんど事故もなく船員の手によって帰還輸送が完了いたしました。

その後わが国は、廃墟の中から復興へと向かっていきましたが、それを支えて大きな原動力となったのは海運・水産業でありました。

しかし、使用された船舶は戦時標準船に代表される劣悪な船舶が多く、厳しい気象、海象の中で多くの船員が殉職いたしました。

昭和46年５月６日に第１回追悼式を行って以来、毎年５月に追悼式を挙行して戦没船員の霊を慰めてまいりましたが、この間、海事関係者の中から、戦後の海難や労働災害で殉職された船員の慰霊に対する要望が高まってまいりました。

昭和56年４月、戦没船員とともに殉職された船員の慰霊顕彰と遺族の援護を目的として、財団法人日本殉職船員顕彰会が設立されました。戦没船員の碑には殉職船員も併せて奉安され、現在は不幸にして職に殉じられた船員の慰霊碑にもなっています。以来、毎年戦没・殉職船員の追悼式が継承実施されています。

なお、水産分野の殉職船員については、一部を除き奉安されずにまいりましたが、平成13年度より水産業界のご協力を得て奉安されることになりました。このことにより、令和７年４月現在奉安されている戦没船員は６万６４３人、殉職船員２、９７５人、総計６万３、６１８人の御霊が奉安されています。

また、天皇皇后両陛下はじめ皇室の方々におかれましては、節目の追悼式や折りにふれて「戦没船員の碑」におはこびいただきました。

令和５年の第50回戦没・殉職船員追悼式には、天皇皇后両陛下のご臨席を賜り、戦没・殉職船員の御霊の鎮魂と、ご遺族の長年の労苦を労っていただいた。

皆様のご厚情に感謝申し上げます

令和6年11月1日以降、令和7年6月30日までの間に、次の方々に新たに賛助会員、協賛会員として加入いただきました。

また、次の皆様からご寄付をいただきました。厚く御礼申し上げます。

当会は基本財産の利息収入、寄付金、海運会社・水産会社および関係団体等の賛助会費・補助金ならびにご遺族や関係者の賛助会費・協賛会費により運営されております。

会費は3種類あり、賛助会費法人　1口　10万円・賛助会費個人　1口　1万円・協賛会費　1口　3千円で、それぞれ年1口からお申込みいただけます。

平成23年4月1日に「公益財団法人」に認定され特定公益財団法人に該当し、平成23年10月27日に「税額控除対象法人」の証明を受けました。

これにより賛助会費・協賛会費を含む当会に対する寄付は税制上の優遇措置が認められることになり、確定申告を行うことにより、「所得控除」もしくは「税額控除」が受けられます。

なお、当会は消費税の免税事業者であるため、インボイス(適格請求書)発行事業者ではありません。

新たな賛助会員

○山内満智子様（岐阜県可児市）

新たな協賛会員

（順不同）

○岡野内俊子様（神奈川県横浜市）○浅沼　卓様（東京都町田市）

追悼式献花料

（順不同）

○榮貴代様（神奈川県三浦市）○保木登茂子様（大阪府豊中市）○平松卓也様（広島県福山市）○新田尚子様（山口県宇部市）○山岸洋様（神奈川県横須賀市）○中野昭男様（愛知県名古屋市）○後藤美津子様（神奈川県横浜市）○今田小夜子様（埼玉県川口市）○齋藤有美様（神奈川県相模原市）○山藤浩子様（広島県広島市）○髙橋柳子様（千葉県富里市）○鈴木弘子様（静岡県焼津市）○和田洋子様（福島県河沼郡）○石川眞佐子様（栃木県下都賀郡）○山本隆様（山口県下関市）○福田陽子様（長崎県雲仙市）○福本健治様（神奈川県横須賀市）○瀬川マツヱ様（神奈川県三浦市）○織田亘様（広島県東広島市）○全日本海員生活協同組合様（神奈川県横浜市）○横須賀市東部漁業協同組合様（神奈川県横須賀市）○鳥羽商船高等専門学校様（三重県鳥羽市）○富山高等専門学校様（富山県射水市）○大島商船高等専門学校様（山口県大島郡）○広島商船高等専門学校様（広島県豊田郡）○弓削商船高等専門学校様（愛媛県越智郡）○宮越健郎様（東京都杉並区）○河合ハル子様（神奈川県横浜市）○宮越康郎様（東京都杉並区）○（一財）全日本海員福祉センター様（東京都港区）○六川博様（神奈川県川崎市）○才津玲子様（神奈川県横浜市）○荒谷秀治様（神奈川県横浜市）○（一財）船員保険会常勤監事金子浩行様（東京都渋谷区）○南洋海運株式会社様（神奈川県藤沢市）○豊丸漁業有限会社様（神奈川県横須賀市）○（一財）日本航路標識協会様（東京都千代田区）○（一財）船員保険会会長霜鳥一彦様（東京都渋谷区）○（公財）海技資格協力センター様（東京都千代田区）○（一社）日本中小型造船工業会様（東京都千代田区）○東郷会様（東京都渋谷区）○（一社）外航船員医療事業団様（東京都千代田区）○荒川博様（東京都三鷹市）○米山香様（東京都北区）○三輪史郎様（千葉県富里市）○横浜海員会館様（神奈川県横浜市）○福岡海寿会様（福岡県福岡市）○才津俊朗様（神奈川県横浜市）○五十嵐温彦様（神奈川県大和市）○望月二朗様（神奈川県横須賀市）○多胡明美様（東京都小金井市）

終戦記念日供花料

○米山香様（東京都北区）

一般寄付金

（順不同）

○福田陽子様（東京都港区）○鮫島庸一様（東京都港区）○研谷紀夫様（大阪府高槻市）○冨田隆滋様（大阪府池田市）○猪股貞雄様（東京都清瀬市）○石井康一郎様（神奈川県横浜市）○大須賀啓子様（神奈川県横浜市）○株式会社鹿児島商運組様（鹿児島県鹿児島市）

知られざる民間船舶の悲劇 戦時徴用船遭難の記録画展 寄付金

（順不同）

○重田育輝様（大阪府羽曳野市）○尾中地区労連様（愛知県春日井市）

遺族援護寄付金

（順不同）

○伊藤光一様（福岡県北九州市）○加賀城福男様（香川県仲多度郡）○関洋一郎様（福岡県福岡市）○新田尚子様（山口県宇部市）○齋藤延子様（埼玉県上尾市）○髙柳恵子様（東京都大田区）○長澤芙美子様（群馬県前橋市）○河合ハル子様（神奈川県横浜市）○坂田茂樹様（兵庫県神戸市）

会長が交代しました

内藤さんから池田さんへ

池田潤一郎新会長

内藤忠顕前会長

令和７年６月23日に開催した第38回（定時）評議員会で、理事・監事の任期満了により、代表理事・会長の内藤忠顕さん（日本郵船特別顧問）、理事長の保坂均さん（日本殉職船員顕彰会）、理事の四方哲郎さん（日本船舶機関士協会前会長）が退任した。

新たに、長澤仁志さん（日本船主協会会長・日本郵船取締役会長）、井上登志仁さん（日本殉職船員顕彰会）、庄司勉さん（日本船舶機関士協会会長）が理事に就任した。

理事12人、監事２人の方々は再任が決議された。

また、評議員の宇佐美和里さん（日本船主協会専務理事）、木上正士さん（大日本水産会参与）から辞任の申し出があり、後任評議員に松本隆司さん（日本船主協会常務理事）、松本冬樹さん（大日本水産会理事・事業部長兼資源管理室長）が選任された。

評議員会終了後、改選された理事、監事によって開催した、第52回（臨時）理事会で、代表理事・会長には、池田潤一郎さん（商船三井取締役会長）、副会長に長澤仁志さん（日本船主協会会長・日本郵船取締役会長）、松浦満晴さん（全日本海員組合組合長）、栗林宏吉さん（日本内航海運組合総連合会会長・栗林商船代表取締役社長）、代表理事・理事長に井上登志仁さん（日本殉職船員顕彰会）が選定された。

終戦記念日献花式

終戦記念日（８月15日）に観音崎公園「戦没船員の碑」で献花式を行います。

ご案内するのは、当会役員など約90人ですが、参列を希望される場合は、バス等の関係から日本殉職船員顕彰会に必ずご連絡ください。

▽午前11時10分京急「馬堀海岸駅」横須賀馬堀海岸郵便局前集合　▽11時15分マイクロバスで戦没船員の碑へ　▽同45分慰霊碑の献花台前に整列　▽「全国戦没者追悼式」のラジオ実況放送に合わせて総理大臣式辞　▽12時黙とう、戦没・殉職船員の御霊を追悼し、海洋永遠の平和を誓います。　▽同02分天皇陛下のお言葉を聞き、閉式となります。

服装は、白ワイシャツ（半袖可）に黒ネクタイの軽装でお願いします。

例年、当会の役職員のほか、海事関係者や当会役員経験者など40人余が参列し哀悼の誠を捧げます。

お知らせ

公益財団法人日本殉職船員顕彰会
電話　03・3234・0662

ホームページ　https://www.kenshoukai.jp　　Eメール　kenshoukai@isis.ocn.ne.jp